



# Tropical London

長崎大学熱帯医学研究所 臨床感染症学分野  
ロンドン大学留学中 加藤隼悟 (21期生)

医学科同窓会の皆様、はじめまして (orご無沙汰しております)、21期生の加藤隼悟と申します。私は今、英国のロンドン大学を構成する学校の一つであるLondon School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) の熱帯医学修士課程 (MSc-Tropical Medicine & International Health) に留学しております。この度、僭越ながら近況報告の機会を頂きましたので、御高覧頂けますと幸いです。

まず、なぜロンドンで熱帯医学かと言うと、歴史と研究実績、優れた指導者が主たる理由となります。ロンドンは英国人よりも移民の方が多く感じられる多国籍な大都市であり、過去の植民地支配の結果、人々とともに疾患の往来もあり、英国にとって熱帯医学は常に自国の問題であったのかと思われまます。LSHTMは熱帯地域の各国研究機関や教育機関と連携し、数々の成果を一流誌に報告しています。卒業生は研究者、教育者として熱帯医学に貢献されている方が多く、国境なき医師団などのNPOやWHO、政府系機関など様々なフィールドで活躍されている人が多くいます。

私の通うMSc-TMIHコースは医師限定の臨床重視コースで、同時にDiploma for Tropical Medicine & Healthも取得できるのが特色です。週に一日は熱帯病病院でClinical Case Studyの日があり、各国から来ている臨床家と議論しながら学ぶ機会があるのも特徴です。



他にも人気が高い公衆衛生、疫学、感染制御など多彩な修士課程がありますが、いずれも3学期約8ヶ月間の講義と実習の後で3ヶ月程度のうちに自ら選んだ研究テーマを元に修士論文を作成し、評価を受けることになります。講義は選択の幅が広く目移りし

ますが、私は臨床感染症系のものを中心に選び、他に疫学、臨床研究に関する講義を選択します。その他にEBMや医療統計の基礎が必修で、グループワークやプレゼンテーションを行います。これは英語力が要求され、日本人学生の多くが苦戦する場面です。



ここへ来て実感するのは、充実した教育体制です。講義の資料や必要なソフトウェアは全て学内のコンピューターから入手可能であり、学外からもインターネットで学内コンピューターへのアクセスが可能で、文献や高額なソフトが熱帯地域からでも利用可能です。他にもITスキルや英語力トレーニングの課外授業もあり、毎日何らかの学術的発表や特別講義も行われています。学びの機会が豊富で、学生をサポートする体制が整っている印象です。ついていくのは大変ですが、努力次第で多くのことを学べる場所だと確信できます。

最後に、熱帯医学とは何かと考えると、熱帯地における医療全般に関わる問題を扱うものであり、熱帯感染症が全てではないと言えます。貧困や感染症に関連する問題が占める割合が多いですが、心血管病変や代謝・栄養関連疾患、悪性新生物や喘息・アレルギーなどの非感染症も熱帯地域で問題となる疾患です。ただ、患者背景、社会背景、資源の限界など、現場特有の事情がある点が重要事項です。公衆衛生や母子保健、福祉、医療・保健行政上の問題も包括的に扱う対象であり、家庭医療における地域包括ケアとの共通性も感じられます。即ち熱帯医学は熱帯地における地域医療、家庭医療、医療政策、医療経済など、幅広い領域を扱う学問のようです。私は今年度学ぶ内容は、将来日本の医療でも活用できると期待しています。いつの日か自分の経験が熱帯医学と、それを志す人のお役に立てられればこの上ない幸せです。